

皆さま、こんにちは。

石毛顧問、ザッパ会長、佃会長、安藤大使、ペトローネ大使、中富副理事長、そしてイタリアおよび日本の産業界の皆様、この第 22 回日伊ビジネスグループ総会でご挨拶できることを大変光栄に思います。経済発展省、イタリア貿易振興会、イタリア産業総連盟、イタリア・日本財団、ローマ工業連合、それから民間スポンサーの皆様に、この会議開催を可能にして下さったことを感謝いたします。

東京で行われた IJBG の中間会議にも個人的に参加させていただいてから数ヶ月が経ちましたが、あのとき両会長にこの会議をローマのカンピドリオで開催するよう招待いたしました。それ以来ローマには様々な変化がありました。ローマはイタリアの他の町と同じような通常の市から首都としての政治体制を整え、友人でもあるウルソ副大臣の協力の下に新しい国際化ツールを備えました。これは経済発展省との合意で、首都の産業の国際化により焦点を当てるようにしたものです。

この総会がローマで開催されるというのは大変喜ばしいことです。といたしますのも、ここで皆様にローマの別の顔を見ていただくことができるからです。日本とローマとの関係を考えた場合、すぐに思い浮かぶのは観光産業でしょう。しかし実際にはローマには大変重要な工業地帯があり、それをより広く知ってもらう必要があります。イタリアと日本の関係強化にも素晴らしい役割を果たすことができると信じております。フィンメッカニカのザッパ会長にはこの地域の重要産業を紹介する機会を作って下さり、感謝いたします。

ここで強調したいのは、ここ数ヶ月で日本に対するローマの注目度が高くなってきたということです。安藤大使のご協力もあり、日本文化をローマで紹介するための数多くのイニシアチブが取られました。これはローマを訪れる日本の観光客を歓迎するためにも大いに役立ちます。

ローマの学生達の間にも長崎と広島の追悼プロジェクトを立ち上げました。学生達に実際に広島を訪問させ、忘れ去ってはならない大悲劇を知ってもらおうというものです。また、映画でも「Un Isola del Giappone」というイニシアチブを立ち上げたり、現在開催中のローマ映画祭でも「ジャパン・フォーカス」という日本の雰囲気を経験してもらおう夕べをマキシー美術館で行いました。これに関しても安藤大使のご協力に重ねてお礼を申し上げます。

安藤大使はまた、歌舞伎公演をローマのオペラ座へ呼んで下さいました。これは大変印象的なもので、その素晴らしい表現能力を持つ芸術形式には感動いたしました。

こうしたことから、文化的な接点はあるというのがおわかり頂けると思います。文化というのは異なる民族、異なる国の間での友好関係、協力関係、そしてビジネス関係を作り上げていく上で最初の伝達手段となるものだと思います。そしてこの道のりには興味深い走路がいくつもあることでしょう。

イタリアおよび日本の産業システムは、互いに補足し合うものがあり、両国は同じ挑戦に立ち向かっていかなければならないことと思います。我々の国の経済は成熟しており、これからはグローバル化に対応していかなければならないのです。その中でバランスを保ち、品質、デザイン、高い付加価値、テクノロジーを持って勝ち抜いていかなければなりません。グローバル化に対抗してい

くのではなく、グローバル化から高い価値を見いだせるよう様々なコンテキストの中で牽引力を保っていかねばなりません。テクノロジーの観点からのみでなく、人間的にみても、価値としてもです。ローマはそういった意味で、非常に重要な架け橋となることでしょう。またさらに我々の経済、そして人々の出会いを可能にする新しいイニシアチブが生み出されることを期待しております。

ローマのような町は特に、多くの日本の町と同じような挑戦に立ち向かっていかなければならないと思います。古くから伝わる伝統、深く根ざしたアイデンティティー、近代化への挑戦というのを一緒に持ち合わせていかなければならないということです。デザインというのは古代と近代を結ぶ伝達手段となります。昨晚、マキシー美術館でみたように、伝統、アイデンティティーの痕跡といったものが近代化への推進力なり、ただ単なる均一化への対抗心としてではなく、真の創造性を持ったものとなるでしょう。

皆様、ローマへようこそお越し下さいました。ありがとうございました。